

かわさき区の宝物シート

宝物No.	こいずみじだゆう
32-1	小泉次大夫

エリア	中央地区	シーズン	通年
	宮前・貝塚	日時	

目的	<input type="checkbox"/> 観る	<input type="checkbox"/> 遊ぶ・体験する
	<input type="checkbox"/> 食べる	<input checked="" type="checkbox"/> その他

宝物定義	<input type="checkbox"/> ものづくり	<input type="checkbox"/> イベント・祭り
	<input type="checkbox"/> 味づくり	<input type="checkbox"/> にぎわい
	<input type="checkbox"/> 現代の文化的なもの	<input type="checkbox"/> 港めぐり
	<input checked="" type="checkbox"/> 歴史的なもの	<input checked="" type="checkbox"/> 人物



所在地	川崎区宮前町6-5 (泉田二君功德碑)
問い合わせ	妙遠寺
TEL	044-222-7162
FAX	044-211-7164
E-mail	
URL	
交通	JR川崎駅より徒歩10分



基礎情報

■水利土木技術を代々受け継ぐ家に生まれた小泉次大夫は、天正18年(1590)徳川家康の家臣として江戸に入り多摩川の治水奉行に任命される。当時の多摩川は度重なる大洪水の影響で村々は荒廃していた。人々の苦しい生活に胸を痛めた次大夫は、家康に農業用水路の開削と新田開発を進言した。

■江戸開幕の直前であった慶長2年(1597)、次大夫は世田谷・六郷領(現在の世田谷・大田区)の『六郷用水』、稲毛・川崎領(現在の川崎市)の『二ヶ領用水』の開削に着手し、以後14年にわたる難工事の陣頭指揮をとった。そして慶長16年(1611)、多摩川で初めてとなる農業用水路が完成し、以降、六郷用水沿川49箇村、二ヶ領用水沿川60箇村の耕地は大幅に村高が増加し、後年に至るまで大きな恩恵を享受できたのである。

由来・エピソード

■次大夫は駿河国富士郡小泉郷(現・富士宮市)の鎌倉期以来「樋代官」を歴任してきた植松家の嫡男として生まれた。植松家は今川義元の旧臣で、富士山の雪解け水で氾濫を繰り返す土地柄であったため、治水工事に精通していたと伝えられている。今川家の没落後、44歳の時に次大夫は徳川家康による武田攻略に参陣し、家臣に取り立てられる。天正18年(1590)、家康の関東入国に従うことを決意し家督を弟に譲り、自らは小泉姓に改めた。改姓は信任の厚かった一歳違いの家康の命によるもので、かねてから出身地になみな家康は次大夫を「小泉」と呼んでいたのである。

■7年後の慶長2年(1597)、次大夫は58歳にして大工事に着手する。故郷からは石川吉久など用水土木技術に精通した有能な技術者集団を呼び寄せた。関係する村々では多くの農民たちが資材や労力を提供し協力した。人夫は各農家の次男以下を徴用し、二ヶ領用水と六郷用水の工事を3ヶ月交代で進めるなど、村の農業生産力の低下をまねかないよう配慮するとともに、グループごとに女性を加えることで労働の士気向上を図ったという。このことから二ヶ領・六郷用水のそれぞれで「女堀」の別称が残っている。こうして二ヶ領用水全長32km、六郷用水全長23km、多摩川両岸の大用水路網が完成した時、次大夫は74歳を迎えていた。

■工事開始時に現在の中原区小杉陣屋町に拠点を設けた際、次大夫が付近の廃寺を再興し新たに開基した「妙泉寺」が、今の宮前町の妙遠寺の前身である。後に日純上人が川崎宿砂子に妙泉寺の本堂を移し妙遠寺を創建した。晩年の次大夫は砂子の妙遠寺で隠居生活を送り、川崎宿が成立した元和9年(1623)12月8日、85歳の生涯を終えた。妙遠寺境内の泉田二君功德碑は、小泉次大夫と田中休愚の二人の偉業を讃え明治時代に建立された「水恩の碑」である。また「逆(あらかじ)め戒名をつける・冥福を修める」という意味の逆修塔(生前につくられた小泉次大夫夫妻の墓塔)が丁重に祀られている。

補足・その他

■明治期以降、二ヶ領用水は農業用水だけでなく工業用水としても利用されるようになり、川崎や横浜の工業地帯の発展に大きな貢献を果たした。少し前までは都市排水路として工場廃液や生活排水の流入で汚れていたが、最近では地域住民による美化運動などが実り、現在では都市生活に潤いを与える環境用水として桜並木や親水施設、散策路などが整備されている。川崎の礎を築いてきた歴史性豊かな用水は、市民が水に親しむ空間、地域のシンボルとして新たな役割を果たしている。

関連シート

(3-1) 妙遠寺・泉田二君功德碑
(32-2) 田中休愚